

ペニス・ピン¹⁾

——サラワク・プナン社会における民主的な快樂——

奥野 克巳

Penis Pin

——Democratic Pleasure among
the Penan of Sarawak——

OKUNO, Katsumi

J. F. Oberlin University, *Obirin Review of International Studies*, No. 19, 2008

桜美林大学『国際学レビュー』第19号（2008年）

Summary

This paper describes and examines the penis pin (*uteng nyi*) among the Penan. The Penan are the nomadic and formerly nomadic groups of hunter-gatherers of Borneo's tropical rain forest in Southeast Asia. Part of the problem concerning the study of the penis pin among the indigenous societies in Malaysian Sarawak is that we still do not know what the penis pin is all about. Western pornographic fantasy that primitive Bornean women crave an augmented penis for sexual pleasure has principally retarded the field research on the topic. In light of the shortage of the field research, this paper primarily focuses on the ethnographic description of sexual behaviors of the Penan as the background data of the sexual device. This paper is based on the anthropological field research conducted between April 2006 and March 2007. This paper concludes that the penis pin is a democratic device that enhances sexual pleasure for both men and women. They share democratic pleasure, based on the relatively free sexual relations.

* * *

1. はじめに

あるとき、ビントゥル (Bintulu) の町の娼館に、順に3人の男たちが入って行った。最初、イバン (Iban) 人の男が入っていくと、娼婦は、手慣れた調子で、新聞を読みながら、性交のサービスをした。次に、クニャー (Kenyah) 人の男が入っていくと、その娼婦は、また、新聞を読みながら、クニャー人の男の相手をした。最後に、プナン (Penan) 人の男が入って行った。娼婦は、もう新聞を読むどころではなくて、新聞を手放して、歓喜の声を上げた。プナン人は、ペニス・ピンを付けていたのである²⁾。

筆者は、最初、この話をクニャー人の男性から聞いた。その後、プナン人³⁾からも、これと同様の話を聞いた。その話には、ペニス・ピンを装着するプナン人の男性の性交渉の威力が語られている。プナン人のペニス・ピンは、娼婦に対して並はずれた快樂をもたらす性具なのである⁴⁾。

ペニス・ピンの威力は、遠く外国にまで知れ渡っていて、近々、白人の娘たちがプナンの居住地にやって来て、誰の装着しているペニス・ピンが最も気持ちがいいか、コンテストをやる予定がある。

このたぐいの話は、筆者は、プナン人の男たちからしばしば聞かされた。ペニス・ピンを用いた性的な快樂をめぐる噂は、広く海外にまで響き渡っており、白人の娘たちがそれを試したがっているというものである。

いずれにせよ、それらの話は、第一に、ペニス・ピンが、ずばぬけた快樂をもたらす性具として、プナン社会の外部で、興味関心をもって語られる対象となっていること、第二に、そのことが、いわば、逆輸入されるかたちで、プナン社会内部において、ペニス・ピンの気持ちよさをめぐる話として語られていることを示している。

ところで、ペニス・ピンは、これまで、研究の文脈において、どのように取り扱われてきたのだろうか。ペニス・ピンは、ボルネオ島のジャングルの奥深くに住む原住民たちの奇妙な性の道具として、1830年代以降長らく、ヨーロッパ人の興味関心を引きつけてきた [Brown 1991]⁵⁾。

ドナルド・ブラウンは、「ペニス・ピン：ボルネオにおける異性関係の解けない謎」と題する総説論文において [Brown 1991]、これまで、ペニス・ピンが、女性の性的快樂を高めるための道具であるという視点から議論されて

きたが、そのことは、ボルネオ島の女性たちが増大させられたペニスの刺激を求めているとして、ペニス・ピンを、ヨーロッパのポルノ趣味の延長線上に捉える誤りを犯してきたのではないかと述べている。そうした興味本位の研究態度の結果、ボルネオ島の先住民がいったい何のためにペニス・ピンを装着するのかに関しては、今日にいたるまで依然として不明のままだという。

筆者は、ペニス・ピンをめぐるヨーロッパ人の興味本位の想像力を批判的に捉えるブラウンの見方に一定の評価を与えながらも、それを快樂の道具であると捉える見方を、手放すことはできないと考えている。

第一に、ブラウンが言うように、ペニス・ピンに関するヨーロッパの興味本位の扱いは、ペニス・ピンが、当該文化のコンテキストにおいて、どのような性行動の様式を背景として生み出され、継承されてきたのかについては、立ち入って調査研究が進められてこなかったことを照らし出す。この点に鑑みて、本稿では、ペニス・ピンを、それが用いられる文化的な背景にまで含めて記述考察することを目指す。第二に、5節で詳しく検討するように、プナン人たちは、ペニス・ピンが、女性に性的な快樂をもたらすだけでなく、そのことによって、男性にとっても性的な快樂をもたらすのだと主張する。本稿では、プナン人に倣い、ペニス・ピンを、性的な快樂の道具であるという観点から検討する。

ところで、ペニス・ピンをめぐる興味本位の関心に由来する調査研究の不足は、性をめぐる人類学の研究が抱える問題に照応している⁶⁾。以下では、性の人類学研究を組上に載せて手短かに検討し、本稿が土台とする性の人類学研究の研究手法を示したい。

性行動を仔細に観察し、体系的かつ豊かに記述した1920年代のマリノフスキーの『未開人の性生活』以降、性に関する事柄が、現地調査を行う人類学者にとっては見えにくく、聞きがたく、調査をするのが難しい事柄であったため、性の人類学研究は、長らくの間、停滞してきた [マリノフスキー 1978: 90; 須藤 1993: 12; 松園 2003:11]。その後、1970年代初めに、性行動の研究をタブー視するかのような人類学者の「紳士ぶった」態度が批判されるようになり、人びとの性行動をめぐる体系的な調査研究が始められたのは、ようやく1980年代になってからのことである [Marshall and Suggs 1971; 須藤 1993]。日本では、1980年代後半以降に、性をめぐる人類学の研究成果が、あいついで公表されてきた [宮田・松園 (編) 1987; 須藤・杉島 (編) 1993; 高畑 (編) 1994; 須藤・栗田・山極・菅原 1996; 松園 (編) 2003]。性の人類学研究は、マリノフスキーの先駆的な調査研究以降の長い停滞期を経て、近

年、次第に盛んに行われるようになったのである。

性研究に関しては、バタイユやフーコーによるフランスの性をめぐる哲学的研究、性をめぐる歴史研究などを含めて、これまで、膨大な知の蓄積がある [バタイユ 2004 ; フーコー 1986; ボナール・シューマン 2001; ドレント 2005; アルテール・シェルシェーヴ 2006]。そのような性研究に対して、性の人類学研究に加えることがあるとすれば、それは、人間の多様な性行動のありようを、経験的により近い観点に立って観察し、記述・解読しようとする点にあるのだといえる。本稿では、以下で、そのような性の人類学研究の観点から、プナン人の性行動に漸近し、それをエスノグラフィックに描写し、その延長線上に、ペニス・ピンを位置づけたい。

以下、2節から4節までは、プナン社会の性行動に関して、成長の過程を軸として、エスノグラフィックな記述考察を行う。具体的には、2節で、プナン人の幼少期の性に焦点をあてる。3節では、若者たちの「夜這い」とプナン人の性行動について記述する。4節では、プナン人の性行動と結婚や家族との関わりを明らかにする。そのような性行動のエスノグラフィックな記述を踏まえて、最後に、5節で、ペニス・ピンについて考察する。

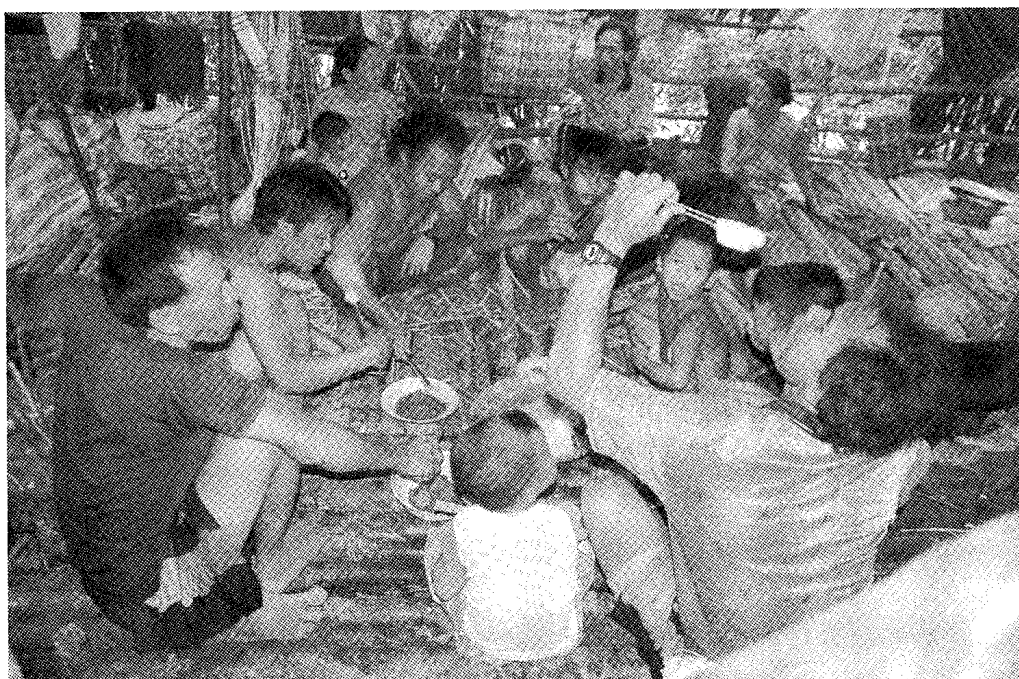


写真1 狩猟キャンプで食事をするプナン人

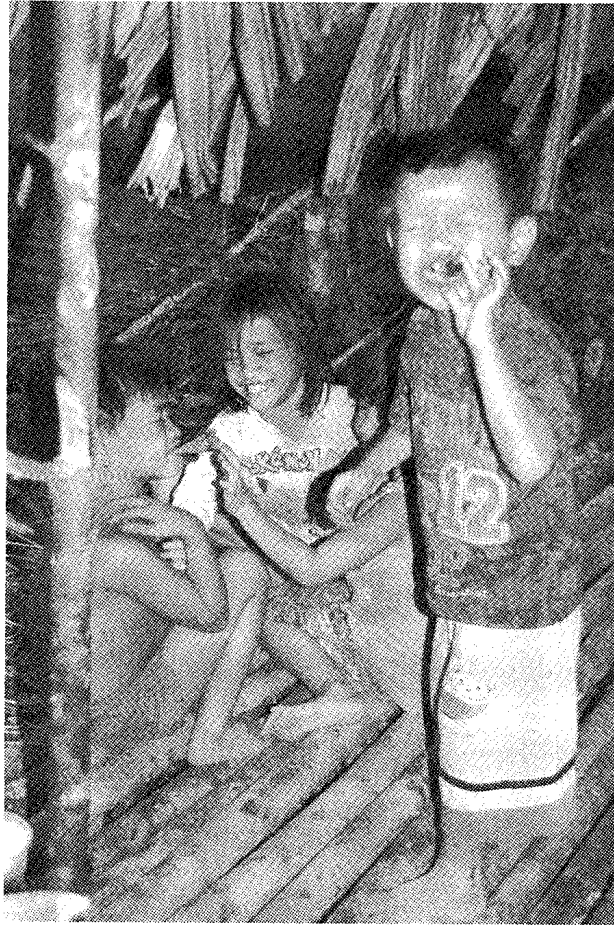


写真2 プナンの子どもたち



写真3 夜這いを始める年頃の男と娘たち

2. 幼少期の性

ある昼下がり、3、4歳の二人のプナンの男児は、ロングハウス⁷⁾の部屋のなかで、真っ裸で遊んでいた。一方が、自らのペニス (nyi) の包皮を手でめくって、亀頭部分をむき出しにした。すると、他方の男児は、それに反応して、よつん這いになって、彼に対して臀部を差し出した。一方の男児は、亀頭の先端を他方の男児の尻に軽く押しつけ、肛門のなかに差し込もうとした。筆者がその二人の男児に名前を呼ばれて、その行為(遊び)を見下ろしたとき、いままさに差し込まれんとしているペニスは、前後に微動しながら、小さく「勃起」していた。しかし、それは、最終的には、挿入されることはなかった⁸⁾。男児の勃起と擬似性交行為の強烈な像が残った。

その後、次第に、プナン語には、「勃起」を表す二つの語があるということが分かってきた。それは、大人の男性の「勃起」(agak)と子どもの「勃起」(ugi)である⁹⁾。そのことによって、プナン人は、「射精 (mesit be ape) 可能 (性交可能) な勃起」と、そうでない「小さな勃起」(=子どもの「勃起」)を弁別している。いいかえれば、そのような二種の語彙は、先の男児のような「勃起」が、射精可能 (性交可能) な、大人の「勃起」とは峻別されるものとして知られてきたということを示している。

男児の「勃起」について、プナン人は、ふつうは、それは小便がたまつたためという説明をする。膀胱に尿がたまつて、「勃起」するという。それは、基本的には、正しい説明なのかもしれない。しかし、問わなければならないのは、その様態に対して語彙が用意されているということである。仮説的に述べれば、それは、プナン社会では、子どもの「勃起」を対象化するような何らかの行為 (=上で見たような擬似性交など) が、日常的に行われてきたためではないだろうか¹⁰⁾。

筆者には、彼の「勃起」は、膀胱に尿がたまつたからではなく、当の行為の過程で「勃起」しているように見えた。あるいは、ことによると、その二つが同時に起こつたのかもしれない。男児の疑似性交は、筆者には、経験的に、彼らが、父母や他者の性交渉を見知って、それを真似たのではないように思える。筆者には、プナン社会の低年齢の男児の「勃起」は、あるいは「勃起」をともなう擬似性交は、男児の裸体 (ugai) の日常化とでもいうべき、プナンの身体の問題に関係するように思われる。

男児は、4、5歳になるまでは、だいたい一日じゅう、真っ裸で遊び回っている。6、7歳になつても、真っ裸で過ごすことが多い。男の子は、第二

次性徴をむかえるまでは、人前で真っ裸であることが多い。そのため、男児、とりわけ、幼い男児は、みずからの身体およびそのパーツを、衣服に覆われたものではなくて、つねに、裸体として、むきだしのまま、直接に、見、触れ、感じる。その結果として、遊びの場面で、自らのペニスにも触れることが多くなる。彼らは、つねに、睾丸のなかに男茎を隠してみたり、包皮の先端を持って、それを伸ばしてみたり、包皮をむいてみたりと忙しい。

つまり、衣服のなかにしまい込まれていないがゆえに、ペニスは、男児の日常の関心物であり、容易に擬似性交などの遊びなどへといたることになる。そして、そのような行為が昂じて、あるいは、行為の過程で、「勃起」を引き起こすのではないだろうか。しかしながら、そのような仮説は、男児たちが、ペニスと戯れていて、そのうちに「勃起」するということを言っているにすぎないのかもしれない。それは、男児たちの「勃起」の一つの可能性を示しているのかもしれない。だが、疑似性交については、依然として不明のままである。いったい、裸の男児たちは、そのような行為へといたる手がかりを、どこから、何から得るのだろうか。

日々の遊びの場面で、年長の男児から、そのような遊びを教えてもらうということもあるかもしれない。しかし、どうやらそれだけではないのかもしれないと、筆者は感じている。先の（擬似性交をしかけた）男児は、あるとき、ロングハウスの通廊で、たくさんの男女の子どもがいるときに、いきなりみずからの包皮をわざわざむき出して、亀頭を露出させて、それを、通廊を歩いている6、7歳の女児の臀部に押し当てようとしたことがあった。女児は、その3、4歳の男児よりは背が高く、男児はペニスを女児の尻の部分に持っていくことができるように、小走りしてジャンプした。女児は、その男児が、何をしているのかを悟った。彼女は、後ろを振り返って、その男児を蹴飛ばした。そうすると、当の男児は、今度は、別の女児の背後に襲いかかっていった。彼は、またもや追い払われるということがあった。

その男児は、あたかも、ロングハウスの通廊を徘徊している猟犬の交尾を真似ているかのようだった。オス犬は、亀頭部を露出させて、通廊を歩き回る。そのうち、メス犬の性器のにおいを嗅いで、背後からメス犬に乗りかかる。男児が真似たのは、ロングハウスの通廊において目の前で繰り広げられる、そのような猟犬の交尾だったのではないのだろうか。何をしていたのかという筆者の問いかけに、その男児は、ペニスの包皮をむき出しただけであった¹¹⁾。

男児たちが、「勃起」したり、疑似性交を遊んだりすることの真の意味につ

いては、はっきりしない。確かなことは、男児たちは、真っ裸の自らの身体を用いて、日がな一日遊びに興じているということである。その過程で、猟犬の動作を真似たり、他の子どもたちの遊びを真似て、疑似性交を遊んだりするなかで、「勃起」したりするということがある。ことによると、真っ裸であるがために、「勃起」することが、容易に、人の目にさらされることになるのかもしれない。つまり、衣服の下に隠されているために気づかないだけであって、男児は、簡単に「勃起」するのもかもしれない。いずれにせよ、そのようにして成長して、やがて、ペニス・ピンを装着することになるプナンの男のペニスは、最初期には、「小さな勃起」とでもいうべき状態から始まる。男児たちのペニスは、「小さな勃起」から「射精可能（性交可能）な勃起」へ、次第に、成長を遂げてゆく。

3. 夜這いと性行動

3-1. 夜這い

プナン人の男女は、第二性徴を迎えると間もなく、性交渉を開始する。性交渉は、ふつう、男が女に約束を取りつけ、夜中に、女性の家を訪れることをつうじてなされる。「ポーカカップ (pekakap)」は、男が、あらかじめ約束しておいた女の蚊帳のなかに忍び込むことを含む、「通い婚」のことである¹²⁾。以下では、プナン語のポーカカップを「夜這い」と記述する。

今日、プナン人の家々（ロングハウスであれ一戸建ての家屋であれ）では、夜になると部屋のなかに、いくつかの蚊帳 (kulabu) が吊り下げられる。夫婦と小さな子どもたちは、通常は、一つの蚊帳のなかに眠る。10歳を越える年ごろになると、少年たちは、父母の蚊帳から出て、新しい蚊帳を吊って、少年たちだけで寝るようになる。娘たちも、またしかりである。プナン人たちは、マラリア対策用に、サラワク州衛生局によって蚊帳が配布される1980年代よりも以前から、自分たちで布を縫い合わせて蚊帳をつくって、寒さ対策に用いてきた。プナン人の居住地は、夜は思いのほか冷え込む¹³⁾。

夜這いは、プナン社会で、あらゆることがそうであるように、とりわけ、初回から、女の家族たちはその事実について知っている。なぜならば、男が、その日の昼間にその家にやって来て、女を含む人たちと談笑した後に、女は、その夜、その男が夜這いにやって来ることを公然と承諾するからである。

日ごろ、夜這いを承諾した女と蚊帳を共にしている姉妹たちは、その夜は、父母やすでに結婚している兄弟姉妹たちの蚊帳のなかに入って、眠ることに

なる。夜這いは、それが行われる時点で、女の家族たちが、その一組の男女の性愛関係のなりゆきを見守ることを含んでいる。夜這いを繰り返すうちに、やがて、その男女の間柄は、周囲に広く知られるものとなってゆく。

そのようにして、ある男が、ある女の男であるとして知られるようになる。しかし、彼女は、その男以外の男に夜這いされてもよいとされている。後述するように、手続きを踏んで、「結婚」していると見なされるようになる以前の女性は、複数の男性との間で性愛関係を持つことも可能である。夜這いをする場合、たいてい、男はその女が誰の女であるのかを知っている。しかし、夜這いをつうじて、女が妊娠した場合どういう処置が取られるのか、つまり、誰がいったい子どもの父親なのであろうか。プナン社会では、夜這い関係にある特定の男性が、生まれた子どもの父親であるとされるようである¹⁴⁾。

3-2. プナン人の性行動

そのようにして、プナンの男たちは、夜這いをつうじて、性交渉を始める。彼らは、実際に、どのような性交渉を行っているのであろうか。

プナンの神話によると、あるとき、人間が、ある場所（バルイ川上流）に突如として出現したという。その後、人間は、川の兩岸に籐のロープを渡して、川を渡ろうとした。プナン人たちの祖先はそれを渡り切って、対岸のジャングルのなかで暮らすことになった。渡るときに川のなかに落ちて、下流まで流れていった人たちは、河口に町を築いて、町の住民となったのだという。

ジャングルで暮らすようになったプナン人たちの祖先は、やがて諍いをして、殺し合いに明け暮れるようになり、その結果、一組の兄と妹だけが残った。プナンの兄と妹は、これからどう生きていくかについて、途方に暮れた。

あるとき大風が吹いて木々が揺れ、その後しばらくすると、あちこちに新たな木が生えてきた。木々が揺れることで、新たな生命が生み出されることを知ったその兄と妹は、木々が揺れるのをまねて性交し（kunyi）、子どもをつくった。その後、大風に揺れる木々のように揺れて（=性交して）、プナンの子孫は、どんどんと増えていった。

プナンの神話では、男と女（兄と妹）が、木々が揺れ、その後、木が生えてくるのを見て、「揺れ」の様子をまねたのが、セックスの起源であるとされ

る。その話には、セックスは、風による木々の「揺れ」のような運動であり、また、セックスが、風が吹いて、種が飛び散り、地面に落ちて、そこからやがて新たな生命が誕生するという、生をつないでいくプロセスの最初の行為である、というプナンの考え方が示されているように思える。

プナン人は、男性器については、三つの部位を認めている。「龟头 (sekat)」、「陰茎 (utan nyi)」、「睾丸 (tulin tilu)」である。他方で、女性器は、やはり3つに分類される。「膣の上位 (ketut)」、「膣の中央部 (tereget)」、「膣の下位 (terenit)」である。性交の体位としては、一般に、「正常位 (ubit)」、「寝たまま (selata)」、「お尻から (jin lotok)」、「座って (monyen)」という4つのパターンが知られている。

筆者は、あるとき、吹き矢 (kelepet) の持ち主の男性から、他の用事をするので、吹き矢をしばらくのあいだ持つように頼まれたことがある。筆者は無意識のうちに、その吹き口を、地面につけてしまった。吹き矢の持ち主は、「そんなふうにはしてはいけない (amai maneu ke)」とつぶやいて、吹き口に塵や埃、土や砂が付いていないかどうかを入念に確かめて、それらを、口で吹き飛ばそうとした。筆者は、吹き矢の吹き口が、吹き矢を吹くために口を付ける場所であるということをつっかり失念していたのである。

プナン人たちが「口唇性交」に対する抵抗感・嫌悪感をあらわにするとき、筆者は、このエピソードを思い出す。口 (uje) は、ことば (=意味) を発したり (piah)、ものを食べたり (kuman)、飲んだり (mesep)、(特定のものを) 接吻したり (marek) する部位であって、性器を刺激するためのものではないと、考えられている。口は、土、砂などとともに、排泄器官でもある生殖器に触れてはならない、人体のパーツだとされる。

ところが、プナン人にとっては、彼らが理解する男性器と女性器は、交合のためだけにある。プナン人は (男性も女性も)、マスターベーション (自慰) をしない。「精液 (be ape)」は、必ず女性器へと射出されなければならないのである。

眠っているときに男が射精することを、プナン人は、「ムリユン (meliyung)」というタームで捉えている。しかし、その文化的な意味は、わたしたちの「夢精」とは、ずいぶんちがうように思う。ムリユンは、たんなる夢精ではない。プナン社会では、寝ている間の射精は、性交の夢と等価であるとされる。ムリユンとは、包括的に、女性と性交渉する夢のことを指している。さらに、それは、一般に、不吉の兆しとして負の意味を帯びている。ムリユンの後には、猟に行けば捕れないだろうし、何か良くないことが起き

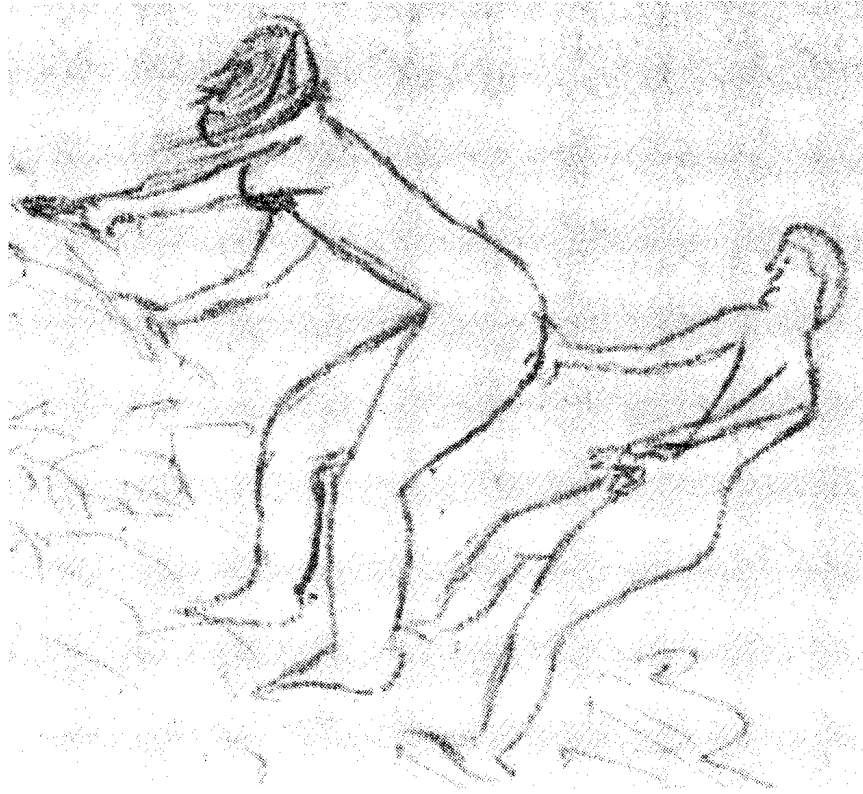


図1 16歳の少年によって描かれた性交渉の図

ると考えられる。

ところで、プナン人は、精液と妊娠・出産の関係をどのように捉えているのだろうか。精液が出産に関わるということについては漠然と知っている¹⁵⁾。しかし、10代の若者たちは、そのメカニズムについては、ほとんど明らかにすることができない。1980年代以降になって、プナン社会へと浸透したキリスト教の神観念を持ち出して、神が子どもをつくるという説明をする若者もいるが、ふつうは、彼らはそのメカニズムについて何も言うことができない¹⁶⁾。

「精液によって、どのように子どもができるのか」という筆者の質問に対して答えてくれるのは、たいてい、30歳代以上の人たちである。性交渉すると、精液は女性の「卵」みたいなものと一緒になって、人間ができる。しかし、繰り返し性交しなければ、それは、子どもにはならない。その40歳代の男性の話を聞いていた別の30歳代の男性は、人間には「卵」はないと言い張った。「卵」は、ニワトリなどの動物にしかない。どうして子どもができるのかというと、精液はじつは血の一種で、その血が、女性の身体の血と混ざり合って、やがて人間となるのだと述べた。さらに、別の30歳代の男性は、性交中に女

性から出る「愛液 (be ape ukin)」が精液と混じり合って、やがて子どもができる」と述べた。このように、プナン社会には、精液と妊娠・出産との因果関係をめぐる安定的な説明はないようである。

本節では、具体的なプナン人の性行動のありようについて記述してきた。まずは、プナンの男女が、夜這いを導入として性行動を開始することを述べた。その上で、精液は必ず女性器へと射出されなければならないとされるため、自慰や同性愛などの性行動がないということを示した。つづいて次節では、プナン人の性行動と結婚・家族の関わりについて記述した上で、その特徴を析出した。

4. 結婚と家族

プナン社会でフィールドワークをはじめて半年ほど経ったある日の午前4時ごろ、ロングハウスの内外が、急に騒がしくなった。筆者には聞こえなかったが、遠くで、人の死を告げる銅鑼の音が、響いたのだという。やがて、隣村のアアン（30歳代女性）の急死が伝えられた¹⁷⁾。夕刻から体調を崩し、そのまま死んだという。

明け方、筆者が親しくしている balan（40歳代男性）が、妹が急死してびっくりした、ついでに、弔問金を融通してほしいと、筆者の寢床にやって来た。筆者は、balanに妹がいたということをそれまで聞いたことがなかった。balanには、同じロングハウスに住んでいる「父ちがいの（=母が同じの）弟」がいるだけだと思っていた。balanによれば、死んだアアンは、balanの「母ちがい（=父が同じの）妹」だということであった。balanにとっては、彼女は、いっしょに育てられたのではない「遠い」妹だという。

その日の午前中、balanに遅れて、筆者は、アアンの死を見届けに行った。アアンの遺体は、横たえられ、飾り立てられ、陳列されていた。筆者は、すでに酔っている弔問客から、酒とビールを浴びるように飲まされて、酔っ払った。早々に、午後2時少し前に、その場から退散することにした。

歩いてロングハウスに戻った筆者の後を追いかけるように、今度は、弔問をつづけている balan から、手紙が届けられた。午後2時に、アアンが死んだ同じ村で、今度は、長らく病床にあったスリン（50歳代男性）が死んだ、ついでに、弔問金を融通してほしいという趣旨のことがしたためてあった。手紙を運んで来た少年は、スリンは、死んだアアンの兄にあたる、と言葉を加えた。さらに、一日に二つの死が起こるなんて、信じがたいと述べた。筆

者は、なんと不幸なことだと思いながら、バランに求められた額のお金を彼に託した。

その翌日になって、筆者は、兄妹が同日に二人も亡くなったその村に足を運んだ。そこには、バランがいた。筆者は、一日に二人の兄妹を亡くして、さぞ、たいへんだったであろうと、バランに悔みを述べた。ところが、バランは、スリンは彼の兄ではないと返してきたのである。

聞いてみると、死んだスリンは、バランの「母ちがい（＝父が同じの）妹」（異母の妹）であるアアンの「父ちがい（＝母が同じの）兄」（異父の兄）であって、バランの兄ではない（＝血縁関係はない）というのである。つまり、バランの父親ラセンは、かつて別の男と結婚してスリンを生んだ女と（一時期）結婚して、アアンをもうけたのであり、それゆえ、バランとスリンは兄弟ではない、血のつながりはないというのだ（図2参照）。

バランによれば、バランとアアンの共通の父ラセンは、ほかにも、複数の女性との間に子をもうけており、その意味では、バランにはアアン以外にも、複数の兄弟姉妹がいる。そして、バランは、現在、遠くの村で健在する彼の父ラセンに、これまで、いったい全員で何人の子がいたのか精確には知らないのだという。それを知りたければ、ラセンに直接尋ねてみるしかないという。筆者は、すすめられるままに酒を飲み、ふたたび酔っ払った。

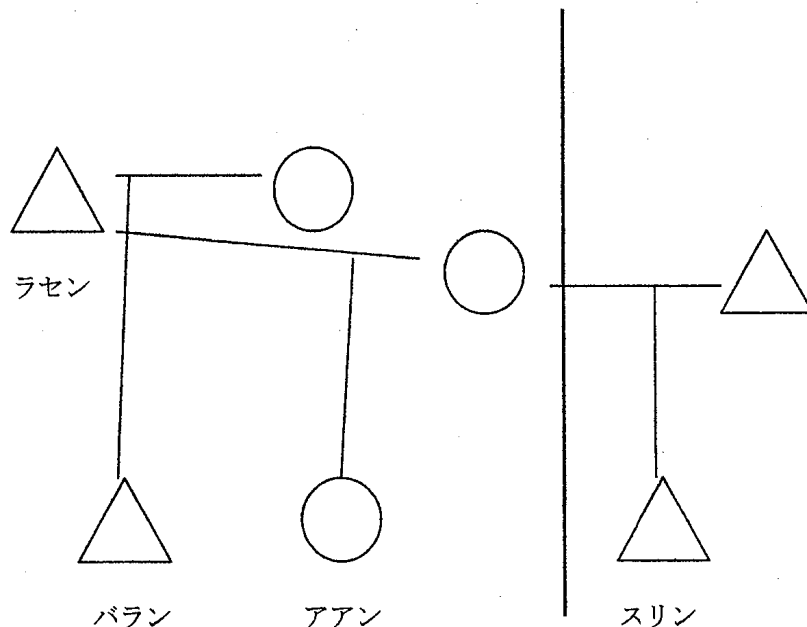


図2 バランをめぐる親族関係図

アアンは、バランの類別的な妹である一方で、スリンは、バランにとって、類別的な兄ではない。

その後、次第に分かってきたのであるが、筆者にとって驚くべきことには、ラセンのような「結婚 (peteu)」が、プナン社会では、ふつうに行われてきたということである。すなわち、人 (男も女も) は、次から次へと「結婚」をくりかえし、そのつど子をなす。

ごく単純化して言えば、「わたしの父」に「わたしの母」とは別の複数の女性と「結婚」していた時期があり、そのそれぞれの女性と「わたしの父」の間に、複数の子どもがある。同じように、「わたしの母」にも、「わたしの父」とは別に、複数の男性と「結婚」していた時期があり、そのそれぞれの男性と「わたしの母」の間に子が複数ある、というような状況が存在する。そして、必然的に、「わたしの父」と「わたしの母」のそれぞれの「結婚」相手にもまた、いくつかの「結婚」遍歴があり、それぞれに複数の子どもがいる (図3参照)。

ここで、あらためて確認しておきたいのは、親族のありようが、当該文化の性行動の様式と深く関わっているということである。プナン社会の場合、「結婚」 (特定の異性に対する性関係の独占) は、必ずしも安定的なものでは

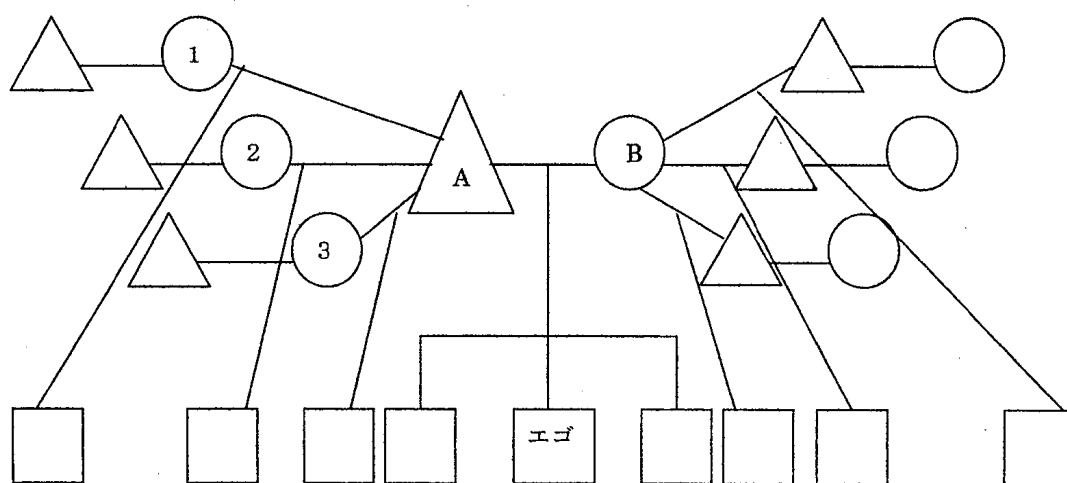


図3 父母の兄弟姉妹概念図

父と母双方が、別の時期に「結婚」した相手との間で生まれたすべての子どもが、エゴの兄弟姉妹となる。四角で示したのが、類別的な兄弟姉妹を含む、エゴの兄弟姉妹。この概念図は、エゴの父Aがエゴの母であるBと「結婚」する前に、女性1、女性2、女性3と「結婚」して、それぞれ子どもをもうけていたことを示している。

ない。性熟後早い時期から、その後、生涯にわたって、複数の異性と「結婚」し、その期間に子をなす。子は、親の「結婚」状態が解かれると、どちらかの親に引き取られて育てられていく。あるいは、どちらかの祖父母の養子となる。「離婚」(pebut)した後に、どちらかの親や祖父母などに引き取られた子どもに対しては、社会的なスティグマのようなものは一切ない¹⁸⁾。

プナン社会において、兄弟姉妹の関係を説明するときに、特徴的な言い回しがある。それは、その兄弟(姉妹)(padie)は、①「一人の父、二人の母(jah tamen, dua tinen)である」(異母兄弟姉妹の場合)、あるいは逆に、②「一人の母、二人の父(jah tinen, dua tamen)」(異父兄弟姉妹の場合)であるという言い回しである。プナン社会では、そういった言い方が、兄弟姉妹の関係に言及するとき一般的に行われるようになるまでに、父母(=男女)双方が「結婚」を繰り返す¹⁹⁾。

プナン社会では、このように「結婚」および「離婚」は、簡単に行われる傾向にある。プナン社会における「結婚」とは、主に、前節で見た夜這いの結果として女性が妊娠した場合に、移行するステイタスのことである。いいかえれば、一組の男女の性関係が継続された状態のことである。最初に「結婚」があるのではなく、最初に性関係があり、それが維持継続されることを「結婚」と呼んでいるのだと捉えてもいいだろう。そのような性関係を解くことこそが、「離婚」なのである。

プナン語には、男にとっての「彼女」(あるいは、ガールフレンド)と「妻」の間の、また、女にとっての「彼氏」(あるいは、ボーイフレンド)と「夫」の間の、明確な線引きはない。そのことは、結婚前後で、相手の名指し方に変化がないということであり、「結婚」が、大きな社会的な意義をもつ事柄とは考えられていないことを示している。

「結婚」しているか、していないかにかかわらず、性的な関係にある相手は、男にとっては「女(redu)」であり、女にとっては「男(lake)」である。「わたしの女(redu kie)」、「わたしの男(lake kie)」は、その関係が、夜這いが継続されることをつうじて公然化するにつれて、「彼の女(redu na)」「彼女の男(lake na)」として、周囲に知られるようになる。そのような呼称は、「結婚」しているか、していないのかにかかわらず用いられるのである。

プナンの「結婚」は、必ずしも、(結婚式や役所への届出などのような)儀礼によって、印しづけられているわけではない。男から女へ、贈り物(指輪など)が送られることが(場合によっては、お披露目の会が)、形式的に行われる場合がある。

その意味で、子どもができることは「結婚」を印しづけることになる。プナンの男女は、子どもが生まれると、お互いを子どもの性別によって、「女の子のお父さん(tamen itung)」「女の子のお母さん(tinen itung)」「あるいは、「男の子のお父さん(tamen uket)」「男の子のお母さん(tinen uket)」と呼ぶ。そのことは、とりわけ、夜這いの結果として、子どもができたときに、夫婦が「結婚」状態にあり、家族を持っていることを自らに確認し、公に示すことになるものと思われる。

本節で見たように、プナン社会では、男女の性愛による結びつきが「結婚」状態へといたる。しかし、「結婚」状態は、容易に解かれる。男女は、次なる性愛の結びつきへといたる。そのようにして、プナン社会の男女は、生涯をつうじて、複数の相手と性愛関係を切り結ぶことになる。

5. 男女双方の性的快楽の道具

プナン人は、幼少期から、性行動を自然なかたちで身につけ、第二次性徴後の早い時期から、夜這いをつうじて、男女の性愛関係を開始する。性愛関係が長引くか、性愛関係によって子どもができることによって、二人は「結婚」し、父や母となってゆく。家族のかたちは、そのようにして、一般に、子どもができることによって、整えられていくのだといえる。

他方で、男女の性愛関係あるいは「結婚」関係は、比較的容易に解消される。独り者となった男女は、別の異性と性愛関係を結んだ上で、ふたたび「結婚」する。そのようにして、男女ともに、10歳代、20歳代、30歳代と、年齢とともに配偶者を変えて、それぞれの「結婚」において子どもをもうけてゆく。ペニス・ピンは、そのようなプナン人たちの性遍歴のなかに登場する性具である²⁰⁾。

ボルネオ島・先住民社会では、ペニス・ピンには様々な現地名があるが、ブラウンによれば、マレー語やイバン語で「十字」や「横木」を意味する「パラン (palang)」が、一般に知られた、ペニス・ピンの現地名であるとされる。さらに、カヤン語では「ウツタン (uttang)」、クニャー語では「アジャ (aja)」という名称が与えられていることが知られている [Brown 1991: 436]。プナン語では、それは一般に、「ウトウン・ニー (uteng nyi)」（ペニスに突き刺されたものの意）と呼ばれている。

ペニス・ピンの心棒には、動物の骨、竹、木、真鍮などの金属などの様々な素材が用いられてきた。両端の突起部分には、原石、葉っぱ、種、羽、豚

の剛毛などが用いられる。ピンの直径は2～4ミリで、長さは21ミリから5センチのものまであるとの報告がある。ペニス・ピンは、ふつう、輸尿管に平行に装着されるが、それと垂直に付けられる場合もある。5つのピンを付ける場合もあるが、通常は、単一のものが付けられる。ピンは、一般に、脱着可能である [Brown 1991:436-7]。

このような報告に対して、筆者が観察したプナン人男性のペニス・ピンは、亀頭に一本の「横木」を貫通させるものではなくて、二本付けるものであった。それらもまた、脱着可能である (写真4参照)。

プナン人の説明によれば、ペニス・ピン装着のための施術は、それに熟達した人物によって、装着部位の感受性を軽減するために、朝まだ涼しいうちに、人目に付かないようにして、川のなかで行われるという。初日は、先端ののがった金属を、輸尿管を傷つけないようにして、亀頭に突き刺す。翌朝には、それよりも大きな金属を刺す。そのようにして、二つのピンを突き刺すことができるほどの大きさになるまで、だいたい1週間くらい、繰り返して施術する。出血はないか、わずかしかない。施術期間の間は、被施術者は塩を口にすることを控えなければならないとされる。ピンについては、持ち主が用意する。もし使用しているものが気に入らなくなった場合には、新しいピンを作成して、付け替えるという。

ところで、男たちは、いったい、どのような経緯でペニス・ピンを装着するに至ったのだろうか。

- ① 子どもが2人できてから、妻からペニス・ピンを付けるように言われたが、わたしはそれを付けたくなかったので、妻とは別れた (30歳代男性)。
- ② わたしは、父親と兄がペニス・ピンを付けていたので、自然と付けるようになった。20歳のころのことである。ペニス・ピンを付けると、女が気持ちいい。女が気持ちいいと、男も気持ちがいい (40歳代男性)。
- ③ わたしは、いまの妻と結婚したとき、妻の前の夫が付けていたので付けてほしいと言われて、ペニス・ピンを付けた (50歳代男性)。
- ④ 1970年代に、数人の日本人が木材伐採の仕事でここにやって来た頃、そう、ちょうどその (前にいる) 若者の年齢の頃 (20歳くらい) に、ペニス・ピンを付けるための施術をした。父親が付けていたからである。ペニスの包皮が剥けたら、ペニス・ピンを付けると思っていたからである (50歳代男性)。
- ⑤ わたしは、そこにいる若者 (17歳) の頃には、まだペニス・ピンを付けていなかったが、こちらの若者 (24歳) の頃には、もう付けていた。父親

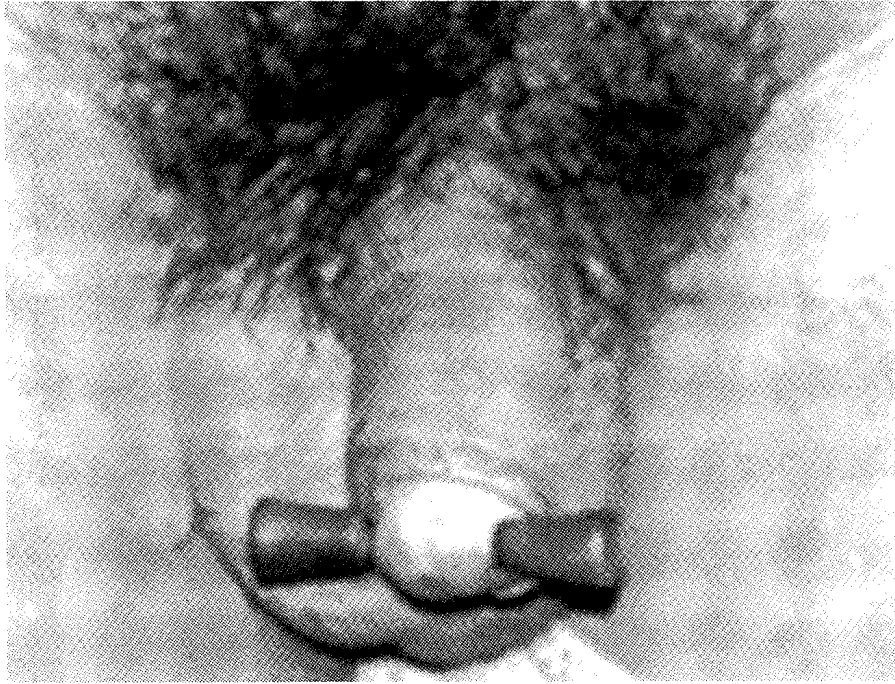


写真4 40歳代後半の男性のペニス・ピン

が付けていたから。誰かに付けるように指図されたのではない（70歳代男性）。

②④⑤の男性は、父親や兄が付けていたから、ペニス・ピンを装着するようになったと語っている。④の男性が語ったように、ペニスの包皮がむけたら、それを装着すると考えていたということなのかもしれない。他方で、妻から装着するように言われる場合もある。①は、妻からの頼みを断った一方で、③の男性は、妻から、前の夫が付けていたので付けてほしいと頼まれたと語っている。

これらのインタビュー・データから明らかなように、ペニス・ピンは、父親や兄など、周囲に装着している人がいれば、若い頃からごく自然に装着するか、あるいは、「結婚」している妻から装着を依頼される。しかし、ペニス・ピンを装着するかどうかについては、もっぱら男性個人の意思に任されている。ここでは、ペニス・ピンが、男女双方の発意によって、装着される点を確認しておきたい。

誰がペニス・ピンを装着しているのかという情報については、筆者の調査地では、かなり精確に、情報が知れ渡っている。特定の集落で、ペニス・ピンを装着している人が多いという情報があったが、インタビューをつうじて、その点は追認された。プナン社会における他の事象と同じように、ペニス・ピンの装着は、私秘的な領域の事柄ながら同時に、公的な関心事でもあるの

だということができる。

ところで、②の男性は、インタビューに答えて、「ペニス・ピンを付けると、女が気持ちいい。女が気持ちいいと、男も気持ちがいい」と語っている。プナン人は、ペニス・ピンを用いれば、「女が気持ちよければ、男も気持ちいい (lake jian tegen daun redu jian rasa)」というような言い方をすることが多い。そのことは、プナン人たちが、ペニス・ピンを、女の性的な快楽を増すだけでなく、男の性的な快楽をも高めるための道具であると捉えていることを示している。

クールワイン (Kuhlewein) は、1920年代に、ペニス・ピンと多産との関わりに関して、ボルネオ島で調査研究を実施している。彼は、1930年の論文で、2,500人のボルネオ島の人びとの生殖器を調べて、ペニス・ピンを装着する確率が高い集団において、必ずしも、子どもの数が多いということはないと報告している [Kuhlewein 1930]。つまり、ペニス・ピンを付けたからといって、(男女が快楽をむさぼり合うようになり) 多産傾向が見られることはないのだという。

クールワインは、調査統計を用いて、ペニス・ピンが単純に多産に結びつくことがないという事実を発見したとして評価できるのかもしれない。しかし、プナン人たちが口をそろえていうように、ペニス・ピンは、性的な快楽のための道具なのである。それは、妊娠するためや、出産を促すための道具ではない。

そうだとすれば、それを生子殖やすことへと結びつけるような、クールワインの捉え方は、問題含みだったのではないだろうか。ペニス・ピンは、性交渉の「回数」を増やすように働く（その結果、生子殖やすことにつながった）のではなく、性交渉の「質」を、すなわち、男女双方の性的快楽の指数を高めてきたのである。それこそが、プナン人自身によっても認識されている、ペニス・ピンの効用なのである。

さて、いまから40億年ほど前に、地球上に生命体が出現したとき、それらは、自身をコピーする「単性生殖」によって殖えた。いまから15億年ほど前になると、刻々と変化する環境に対処するために、自身と同じ組成をもつ生命体を殖やすのではなくて、二個体（雄と雌）の遺伝子を分け合った新たな生命体をつくり出すようになった。そのようにして、「性」が誕生したとされる [長谷川 1993: 14-30]。

霊長類の世界では、一般に、メスに現れる発情徴候に反応して、オスが性的に興奮することで、交尾が行われる。それに対して、ヒトでは、発情徴候

が失われている。そのため、ヒトは、いつでも性交渉をすることができるし、逆に、性交渉とずっと無縁でもいられる。「性のアウトサイダー」としてのヒトは、発情徴候を失ったかわりに、「性愛」という性幻想を手に入れて、それを原動力とすることで、性行動に向かうようになった [山極 2003: 62-68, 96-104, 196-200]。

そのため、ヒトは、日常においてため込んだ過剰を一気に蕩尽するような性行動を行うのだとされる。人類社会における性の道具は、性の過剰の蕩尽をより大きくするために与えられたのだと考えることができよう [栗本 1981: 124-5] ²¹⁾。

そのような性の人類史を視野に入れるならば、ペニス・ピンとは、比較的自由に性愛関係を切り結び、その相手を変えていくことが常態化されているプナン社会において、男女双方にとっての性愛生活を豊かにするために生み出され、維持・継承されてきた性的快楽のための道具であると捉えることができるのではないだろうか。その性器変工には、女性による男性の性の管理という意味合いはない。ペニス・ピンが、男女双方の性的な快楽の道具であれば、プナン社会では、性行動の文脈において、民主的な快楽が実現されていることになる ²²⁾。

6. おわりに

本稿では、マレーシア・サラワク州のプナン社会のペニス・ピンという性具を、彼らの成長に伴う性行動のありようと社会的な生活の文脈のなかに位置づけた。プナンの男性は、幼少期から、主に、触覚をつうじて、自らの生殖器に接近する。射精可能（性交可能）な年齢以下の少年・幼児の「勃起」は、言葉の上でも、内容の面においても、射精可能な「勃起」と峻別されている。小さな「勃起」は、やがて、射精可能な「勃起」へと遷移する。

第二次性徴を迎えると、男女は、次第に、夜這いをつうじて、性愛関係を結ぶようになる。性行動についていえば、精液は、必ず女性器へと射出されなければならないとされている。マスターベーション、ホモセクシュアルなどの性行動は、プナン社会では、観察されない。男女のヘテロセクシュアルな性愛関係の結果として、子どもが生まれたならば、「男の子の母親」「男の子の父親」……などと呼び合うようになり、子どもを核として、一組の男女は親となり、そのことにより、次第に、家族のかたちを整えていく。

ところが、そのような「結婚」の結びつきは、容易に解かれうる。男女は、相

手を替えて、次の、さらには、その次の「結婚」をする。子どもたちは、どちらかの親に引き取られるか、祖父母の養子となる。

ペニス・ピンとは、そういったプナン人の性行動の遍歴のなかで、男女双方の性的な快楽を高めるための道具として用いられてきた。それは、彼らの性愛生活に、深みや豊かさを与えるものとして、生み出され、継承されてきたのである。ペニス・ピンの脱着は、基本的には、男性個人の意思に委ねられてきたが、その装着については、周囲が後押しするものであることが分かった。

ベッカーは、かつて、「性肯定社会」と「性否定社会」という両極を設定した上で、通文化比較の観点から、地球上の諸社会における性行動に対する態度・志向の理解のための枠組を提示しようとした。「性肯定社会」とは、性行動が、生殖だけでなく、快楽のためでもあるということをも認めた上で、そうした行動が社会の繁栄につながるという意識をもち、複数の相手との性交渉についても、寛容な態度を示すような社会である。他方で、「性否定社会」とは、性行動が、心身の衰弱だけではなく、社会を衰退させるものであると考えられ、淫らな性行動を嫌悪し、それを規制し、限定し、禁止する傾向をもつ社会である [Becker 1984]。

ベッカーの類型化に関しては、その後、幾つかの批判的な見解が提出されてきたものの [須藤 1993]、そのような試みは、人間社会の性行動の多様なありようを理解するための分析枠組を示している点で、示唆に富んでいる。サラワクのプナン社会は、男女ともに自由な性愛関係を結ぶことに熱心であり、また、そのことを大らかに認め、さらには、ペニス・ピンという性具を維持・継承し、その文化的な価値に対して、とりわけ、性的快楽に対して包み隠さないエトースをもつ点において、ベッカーの類型化に従えば、「性肯定社会」の一つと捉えることができるように思われる。

そのような「性肯定社会」において、プナン人たちも認めるように、ペニス・ピンが男女双方の性的快楽の道具だとすれば、そこでは、民主的な快楽が共有されているのだと言えるのではないだろうか。

注

- 1) 本稿は、筆者の2006年度の一年間の学外研修の報告の一部である。
- 2) ビントゥルは、南シナ海に面した、マレーシア・サラワク州第4の都市。イバン人、

クニャー人とともに、焼畑稲作を生業とするサラワク州の先住民であり、プナン人の隣人でもある。

- 3) プナンは、ボルネオ島で、過去および現在に採集狩猟を生業として暮らす人びとに与えられた総称である。彼らは、数十人程度で移動しながら、森の中のイノシシ、シカ、サル類などを狩猟し、サゴヤシ、果実類などを採集して暮らしてきた。そのうち、サラワクのプナン人とは、マレーシア領サラワク州に居住する人口約1万人の人びとである。約7,000人が、バラム (Baram) 川流域とその周辺 (東プナン人、4,500人) およびブラガ地域 (西プナン人、2,500人) に住む。バラム川流域には、森のなかで狩猟採集によって生活する400人ほどのプナン人人口がいる [Brosius 2000:1-28]。本稿が取り上げるのは、後者の西プナン人である。筆者は、2006年度の学外研修期間を利用して、そのほとんどを、ブラガ川上流域に暮らすプナン社会のフィールドワークに費やした。
- 4) 5節で後述するように、プナン人だけが、ペニス・ピンを装着してきたのではない。それは、広く、ボルネオ島先住民の、男性によって装着されてきた。筆者の調査地域であるブラガ川流域では、今日では、ペニス・ピンを装着するという習慣は、プナン人だけが維持継承するものとなっている。
- 5) そうだとすれば、プナン人のペニス・ピンをめぐる上述のような語りには、外部者や欧米人によるペニス・ピンへの興味本位の語りを逆手にとって、笑い飛ばすような気概があるというふうにも考えられる。
- 6) それは、じつは、ペニス・ピンをめぐる調査研究が、興味本位に扱われたということだけに起因するのではない。ペニス・ピンを含めて、性をめぐる事柄自体が、調査者にとって、扱いにくい領域なのである。
- 7) プナン人たちは、今日、近隣の焼畑稲作民と同様にロングハウスに居住している。狩猟をするために、あるいは (多くの場合、不法) 木材伐採をするために、ジャングルのなかにキャンプを張って生活することもある。ときには、そのようなキャンプ生活が、1ヶ月くらいつづくこともある。その意味で、プナン人は、今日、定住・半定住生活をしているのだということができる。
- 8) 筆者は、そのとき、とっさに、カメラを取り出してその様子を撮影しようとしたが、次の瞬間、そのことをためらった。彼らは「恐るべき子どもたち」であるという、筆者が生まれ育った文化から発信されるメッセージが瞬時に思い浮かんだからである。筆者は、その行為を撮影することはなかった。
- 9) 1980年代にブラガ川流域でプナン社会の民族音楽的な調査研究に従事したト田によれば、「アガックの状態になってはじめて、子どもを作ることができるのであって、ウギではまだだめなのである」 [ト田 1996: 143-144]。
- 10) プナン社会において、男性の「勃起」は、必ずしも、私密的な領域にのみ閉じ込められるものではない。そのことは、男たちが、公共空間で、ひんぱんに、それに類する語を発することに現れている。男同士で冗談を言い合うとき、“buat nyi” (長いペニス)、“jaau nyi” (大きいペニス)、“dee nyi” (血が回ったペニス)、“agak nyi” (隆起したペニス) という言い方がある。それらは、みな「勃起」した状態を意味する。また、未婚男性は、自らの「勃起」を、「女を探しに行く (pitah redu)」理由として声高にかかげることがある。そのように、プナン社会では、「勃起」は、男性個人の下半身の現象として、隠されているのではないのだと言える。
- 11) 男児が、第二次性徴の直前まで、ペニスを人前で露出するのに抵抗を覚えることがないのに比べて、女児は、早くから衣服を身に着ける。ヴァギナ (ukin) は、早い時期に、3、4歳で、衣服に覆われることになる。その後、女児たちは、衣服を

着けたまま川のなかで水浴びをおこなう。女兒が、いつごろから、人前でヴァギナを露出することを恥ずかしいと感じたり、抵抗を覚えたりするのは、はっきりしない。はっきりしているのは、大人たちが、つねに幼い女兒に衣服を身につけるように仕向けているということである。このことは、大人が男児に対して、そうすることがないことと対照的である。後に見るように、10代の早い時期から性経験を開始することが多いプナンの女性たち。かつて、栗本慎一郎は、バタイユの「蕩尽論」を援用しながら、ヒトという動物は、脱ぐためにパンツをはく（＝衣服を身につける）のだと説いた [栗本1981]。その意味で、パンツ（＝衣服）は、脱ぐことによって得られる性的な快楽を極限にまで高めるための装置なのである。その点を念頭に置けば、プナン社会で、女兒に対して、早くから性器を衣服で覆うように仕向けるのは、快楽を志向する男たちの欲望であるのだということができのかもしれない。

- 12) 恋愛関係にいたる性愛の実践知のシナリオとして、菅原は、「誘惑のシナリオ」を想定している。「私の欲望が向かう相手が、私のことをどう思っているのかは未知である。私がためらいがちに相手に働きかける。相手から返ってくる応答を徴候的な手がかりとして、私は相手の心のなかに私に向かう同型の欲望を読みとろうとする。この探索によって、肯定的な徴候が増えれば増えるほど、相手の欲望に対する私の確信は深まり、私の誘いかけはより直截さを増してゆく。このフィードバック過程の帰結として、私は相手と性交する」 [菅原 2004: 148]。菅原が言うように、このシナリオは、人間社会において高い普遍性をもっている。プナン人の男女も、基本的には、このようなシナリオをつうじて、夜這いを行い、性交渉するのだと言える。
- 13) その意味で、蚊帳は、従前より、プナンの寒さ対策の一つであった。
- 14) ヴェネズエラのアマゾン河下流域のバリ (Bari) 人社会では、男がマニオク耕作や狩猟に精を出し、女がそのサポートをする。その結果、男たちには豊富に食べ物があるが、子どもたちには食べ物がなかなか行き渡らない。他方で、男たちは、外部社会との関係において、命を落とすことが多く、男性の人口比が少ない。そのような社会状況を背景として、結婚後、女は妊娠すると、インセストタブーの範囲外にある姻族の複数の男性と性交渉をする。妊婦の「恋人」は、胎児の健やかな発育に効果的であると考えられている。出産後母親になった女たちは、森のなかで、村の女たちを前にして、妊娠中に性交渉した男たちの名前を明かす。それを聞いた村の女たちは、村に引き返して、性交渉の相手と名指しされた男たちに、子どもができたと伝える。その複数の父親たちは、狩猟の獲物やマニオクなどの食糧を、贈り物として、新生児に授ける。その子どもが大きくなると、今度は、母親は子供に向かって、(妊娠後に性交渉した)「父親」を指さして、「あれがおまえのお父さんだよ、魚や肉をもらえよ」という [Beckerman and Valent (eds.) 2002]。近年の性的人类学は、そのような「複数の父親」をもつ文化について報告している。生物学的な父親であれ、社会的な父親であれ、父親というのは、その社会・文化によって規定されるのである。
- 15) 人間社会には、精液と妊娠・出産には何のつながりもないと考える人たちもいる。マリノフスキーによれば、トロブリアンダ諸島民は、「男の精液が生殖力をもつことを全く認識していない」 [マリノフスキー 1978: 139]。彼らは、霊児が、女性の胎内に入ることによって妊娠すると考えている。「子供が入るための道が開いてなければならぬ… (中略) …しかし必ずしもそれが性交によらなくてもよい。この点は明瞭で、単に「女の堅いもの」と呼ばれている生理的障害物がとり除かれて、

- 膣が空いていればよいのだ。普通は性交によるのだが、一度こういう状態になれば、それから子供をつくるために男女が一体になる必要はない」[ibid]。
- 16) その意味で、若者たちは性の理論派でなく、性の実践派であるということができるとのかもしれない。
 - 17) 本稿で用いる人名は、すべて仮名である。
 - 18) 難題は、そのような複雑な親族の系譜を、一枚の平面の上に書き記すことである。難問は、それだけではない。プナンは、ひんぱんに養子を取る。「結婚」して子どもがいない場合だけでなく、夫婦が年を取って、小さな子どもがいない場合など、同村から、隣村から、生まれたての子どもを「養子 (anak amung)」とする。養子を「実子 (anak lan)」と明確に区別しながら、聞き取りをし、どのようにそれらを系図上に書き起こしていくのかということも、じつに厄介である。
 - 19) 30歳代半ばの男性ラジャンは、現在の妻であるメリとの間に8人の子どもがいる。ラジャン自身および周囲の人びとによれば、彼は、10歳代の半ば頃に、別の村からやってきた娘2人と「結婚」して、それぞれに一人ずつ、計2人の子がある。その10人の兄弟姉妹は、「一人の父、三人の母」による兄弟姉妹であるとされる。それに対して、60歳代の男性ラティンは、これまでに、10人の女性との間に14人の子をもうけたことで知られる。14人の兄弟姉妹は、「一人の父、十人の母」の子どもたちである。ラジャンは3回、ラティンは10回「結婚」したということになる。
 - 20) 吉岡は、「生きている人体の一定の部分に、長期的ないし不可逆的な変形や傷を、意図的につくる習慣」[吉岡 1989: 5]を「身体変工」とし、性器変工を、その一つとして位置づけている。性器変工とは、「セックスの際、相手の女性の性的快楽を増大させるため陰茎亀頭に異物を入れること」[ibid:25]である。吉岡は、インド洋のカプル島の先住民、ボルネオのダヤク人、フィリピンのビスホス人、セレバスのアルケール人の性器変工について紹介している [ibid]。
 - 21) ヨーロッパの性的な快楽の歴史を記述考察したマーゴリスによれば、性が忌避された19世紀のヴィクトリア朝期を経て、20世紀のヨーロッパにおいて、性は解放された。20世紀の性の解放を背景として、今日、携帯電話会社が、契約者に電動式バイブレータをプレゼントしたり、女性の人差し指に装着する自慰補助具などが開発されたりしてきている [マーゴリス 2007]。性の道具は、性の解放をベースにして、ますます進化する。
 - 22) ウィーン性科学研究所編の『性学事典』によれば、性感補強器とは、性欲の興奮と満足のために用いられるものである。ジャワでは、「牝山羊の脛の皮を亀頭の周りに結びつけ、あるいは牝山羊の皮を細く切ったものを結びつける」「行為の際にこれを亀頭につけ、フリクションで痛みを覚えさせるようにする」[ウィーン性科学研究所 (編) 2007: 262]。「日本で使用されている甲形(「かぶと」と呼ばれる)という性感補強器がある。亀の甲または骨で作られた器具で、『婦人に十分な喜びを与え、同時に妊娠を防ぐ』もの」[ibid:263]である。そのような性具もまた、それぞれの社会において、男女の民主的な快楽の道具であると捉えることができるだろう。

引用文献

- アルテール、アンナ・ペリーヌ シェルシェーヴ 2006 『体位の文化史』藤田真利子・山本規雄訳、作品社。

- バタイユ、G. 2004 『エロティシズム』ちくま学芸文庫。
- Becker, George 1984 “Social Regulation of Sexuality: A Cross-Cultural Perspective” in *Current Perspectives in Social Theory: A Research Annual*. McNall, Scott, G.(ed.), pp.45-69, Greenwich, London. JAI PRESS Inc.
- Beckerman, Stephen and Paul Valent (eds.) 2002 *Cultures of Multiple Fathers: The Theory and Practice in Lowland South America*. University Press of Florida.
- ボナール、マルク・ミシェル シューマン 2001 『ペニスの文化史』藤田真利子訳、作品社。
- Brosius 2000 “Bridging the Rubicon: Development and the Project of Future in Sarawak”, in M. Leigh (ed.), *Borneo 2000: Politics, History & Development*. Universiti Malaysia Sarawak.
- Brown, Donald, E. 1991 “The Penis Pin: An Unsolved Problem in the Relations between the Sexes in Borneo”, in Vinson Sutlive (ed.), *Female and Male in Borneo: Contributions and Challenges to Gender Studies*. Borneo Research Council.
- ドレント、イェルト 2005 『ヴァギナの文化史』塩崎香織訳、作品社。
- フーコー、ミシェル 1986 『性の歴史：知への意思』渡辺守章訳、新潮社。
- 長谷川真理子 1993 『オスとメス＝性の不思議』講談社現代新書。
- Kuhlewein, M.von 1930 “Report of a Journey to Upper Mahakam (Borneo), February-May 1929”. *Meedeelingen van den Dienst der Volksgezondheid in Nederlandsche-Indie, Foreignn-edition* 19:66-152.
- Marshall, Donalds. and Robert Suggs 1971 *Human Sexual Behavior: Variations in the Ethnographic Spectrum*. Basic Books, Inc. Publications, New York/London.
- 栗本慎一郎 1981 『パンツをはいたサル』光文社。
- マリノフスキー、ブラニスラウ 1978 『未開人の性生活』泉靖一訳、新泉社。
- マーゴリス、ジョナサン 2007 『みんな気持ちよかった！—人類10万年のセックス史—』ヴィレッジブックス。
- 松園万亀雄（編） 2003 『性の文脈』雄山閣。
- 宮田登・松園万亀雄（編） 1987 『文化人類学4：特集＝性と文化表象』アカデミア出版会。
- 須藤健一 1993 「序——社会人類学と性研究」、須藤健一・杉島敬志（編）『性の民族誌』pp.11-31、人文書院。
- 須藤健一・栗田博之・山極寿一・菅原和孝 1996 『性と出会う——人類学者の見る、聞く、語る』講談社。
- 須藤健一・杉島敬志（編） 1993 『性の民族誌』人文書院。
- ト田隆嗣 1996 『声のカーボルネオ島プナンのうたと出すことの美学』弘文堂。
- 菅原和孝 2004 『ブッシュマンとして生きる——原野で考えることばと身体』中公新書。
- 高畑由起夫（編） 1994 『性的人类学—サルとヒトの接点を求めて』世界思想社。
- ウィーン性科学研究所（編） 2007 『性学事典』高橋鐵訳、河出i文庫。
- 山極寿一 2003 『オトコの進化論——男らしさの起源を求めて』ちくま新書。
- 吉岡郁夫 1989 『身体的人类学——身体変工と食人』雄山閣。